悪ノ娘ノ召使

のぁ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪ノ娘ノ召使

【Ｎコード】
Ｎ１５３５Ｓ

【作者名】
のぁ

【あらすじ】
美しい赤レンガの町並み。風にそよぐ小さな花。
秋になると畑は一面の麦畑が風に吹かれて黄金色になびいてみえた。そんな事からいつしか黄の国と呼ばれるようになったその王国では、未だに迷信深い一面があった。いつから言われだしたかは分からない。元々は流行病の事だったのだろうに。なぜだ？神の気まぐれだろうか？この国でもっとも身近な悪魔。それは一卵性の顔のよく似た双子。双子なのだ。そして生まれた王の跡継ぎは、まるでよく出来たドールのような、まるで本当に人形が生まれてきたような、そ

んな双子の姉弟だった・・・。

プロローグ（前書き）

これは悪ノP様の楽曲、悪ノ娘　悪ノ召使の世界観を元に私独自の解釈で書かせて頂いていこうというものです。なので本家様はほとんど無視する形になります。また本家様の小説を読んで、楽曲に出てこなかったシーンがあることから私個人の空想、妄想で勝手にシーンを増やそうとも思っています。これらの事をよくないと思う方は読まない事をお勧めします。それでもいいと言う方はどうぞ感想をお願いします。

プロローグ

人々の笑う声。
活気付いた市場の商人達の威勢の良い声。
奏でられる音楽、そして歌声。
人々は幸せだった。これ以上は無いというほど幸せだった。
それもそのはず。
ここ黄の国では長年にわたって続いていた国境での紫の国との戦争もようやく幕を閉じ、やっと平和な生活が戻ってきた所なのだ。
長く長く続いていた戦争が、終わったのだ。
人々は神に感謝し、祈りを捧げた。
この国で一番大きな教会にこぞって集まり、美しい賛美歌をその声で奏でた。それに共鳴するように、鐘の音が美しく響き渡る。

まだ迷信が世界を支配していた時代。
まだ花に、森に、湖に、鳥に、蝶に、風に、苗に、空に、海に、神様が宿っていた時代。
そして、まだどこにでも化け物が、魔女が、・・・アクマがいた時代。

プロローグ（後書き）

簡単なプロローグのつもりです。
気楽に投稿するのであまり気にせずのんびり読んでやってもらえたらありがたいですね（笑）

跡継ぎ

王は困惑していた。
なぜだ？どうしてだ？どうしてこんな目に遭わなければいけない？と。
そして落ち着きもなく寝室の中を行ったり来たりしながら、苛立ちをかくせない様子で腕を組み、眉間に深いしわをよせている。
王妃はそんな様子の王を心配しながらも、かける言葉が思い当たらないらしくベットの上でじっと自分の手元を見つめている。
部屋の中ではただただ騒々しく、赤子の産声だけが響き渡っていた。
いたたまれなくなった助産婦が、何とか口を開いた。
「その、・・・この、双子の赤ん坊を、どうするべきでしょうか・・・？」
なるほど、助産婦が指差すかごの中にはまるで人形のような、そう言い表すほかないほどの白い肌が雪の様な双子の赤ん坊が意味有りげに、まるで手をつなぐようにして泣いていた。
その容姿はよく出来た、まるで生きているように見える人形のよう。
この言葉を聴いて、生きているのだから当然、と思う人がいるかもしれない。しかしそういう事では無いのだ。
そう、二人はまるで人の美意識にそって作られたような、そんな姿なのだ。
たとえるなら調度品。たとえるなら絵画。そして、たとえるなら幼い少女を模ったドール。
白い肌、赤い唇、ガラス玉で作ったような深い海のような瞳。その奥のかすかな、グラデーションのようなマリンブルー。その瞳を縁取る、麦畑でいつか見た黄金色を思わせるような美しい金色の睫毛。同じ色の、光に透ける細い髪の毛。ほんのりとした桃色の頬までが、まるで二人を人形へと仕立て上げているようだ。それはまるで腕の良い職人が何年もかけて仕上げた作品。専ら、そんな腕の良い職人

が存在する、存在したかは別の話になるが。
ただ、間違いなく言えることはドールを集めるのが趣味な金持ちの連中なら、血相を変えて欲しがるような、そんな容姿だということだ。

しかし、王にとってはそんなことは関係などしなかった。
「どうする？だと！？そんな当たり前のことを！」
王は怒鳴るようにそう吐き捨てた。
「顔のよく似た双子は悪魔の象徴。この国では最も身近な悪魔と呼ばれている。今すぐ殺すに決まっているだろう！？」
王の様子に、助産婦は小さく
「はい・・・」
とだけ返事をした。
王妃は王の言葉を聞くと血相を変え、とっさに
「待ってください！！」
と叫んだ。
王も助産婦も、驚いた顔で王妃を見た。止められる理由など、すぐには思いつかなかった。
王妃はやっとの思いで口を開く。
「私達が、望んで望んでやっと授かった子供達ですよ？私も王も、この日をどれだけ待ちわびたかお忘れですか？私には出来ません。せっかく授かったわが子を殺してしまうなんて、私には・・・出来ません。」
王妃の言葉に、王はため息のような微かな声で
「王妃・・・」
と呟いた。
（王妃の気持ちは、痛いほど分かる。この期をのがしたらもう跡継ぎは生まれないかもしれない。しかし、しかし、こやつらのどちらかは・・・悪魔なのだぞ？）
双子は悪魔の象徴。しかし正確には、悪魔が人間とすげ変わろうと

して赤子そっくりな姿で人間の女の腹に忍び込み、本物の赤子が殺され、運良く自分が生き残ったときに大きくなってからたくさんの人を食らうと言う伝承が元になっていて、基本はどちらが悪魔でも問題が無いように、二人とも殺してしまうのだ。双子と言っているがもちろん三つ子も四つ子も同じ扱いになる。
ただ、三つ子や四つ子が生まれてくる例が極めて少ないので『双子』が悪魔の象徴と呼ばれているのだ。
長い沈黙の後、王は静かに意見を出した。
「ならば・・・この二人のうちどちらが悪魔か見分けることにしようではないか。」
その言葉に王妃はさっと顔を上げたが、なにも言うことは無かった。
王は、そっとかごに近づくと、まじまじと双子を見た。
誰も、何も言うことは無かった。

跡継ぎ？

王は赤子達にそっと触れた。
別に変わったことは無い。容姿を除けば普通の赤子だ。
そして、片方をそっと抱き上げてみた。
？がれた手はいとも簡単にほどけてしまった。
やはり深く考えすぎだったのだろうか・・・。
王は小さく唸った。
その様子を王妃と助産婦はただただ黙って見守っていた。
ふっと、王はそこであることにきずいた。
おそらく、とっくに助産婦はきずいていたのだろう。
いつの間にか彼女の視線は自分のつま先へと向けられていた。
「片方の赤子が・・・男だ。」
王妃はその言葉が意味することが、よく理解できなかった。それがなんだというの？
「・・・あの、今なんて？」
王妃は訝しそうに尋ねた。
「片方が男だ。」
王は、今度ははっきりとそう言った。
「・・・それが何だと言うの？」
王妃はもう一度訝しそうに尋ねた。
「片方が男だと言っている。見ろ、こんなに人間離れした美しさなのだ。それなのに、それなのに片方は男だというのだぞ？おかしいであろう。こんな少女がいたとしても、こんな少年がいるなんて聞いたことも無い。悪魔はこいつだ。嗚呼、助産婦すぐにこやつの首を絞めて殺しておくれ！早く私達の間に悪魔が生まれた事実を消し去ってくれ！」
始めは落ち着いた様子で話していた王が、だんだんと早口になり、大声でわめくように叫びだした。

王妃は目を見開いた。そんな理由で、そんな理由で小さな命を殺すというの？
悪魔、それはとても曖昧で適当なもの。
他国から嫁いできた王妃にとっては、理解できない習慣でしかなかった。
王妃とて神を、悪魔を信じていない分けでわない。
流行病に怯え、神にただただ祈りを捧ぐ。
大雨も大風も洪水も嵐も、みんな神の怒りや悪魔の仕業だと思っている人間の一人だ。
ただ・・・おかしい。この国は、おかしい。
王妃の国では子供は祝福され生まれてくる。それは言うまでもないこと。
もちろん、まれに生まれてくる指が足りなかったりする子供は、悪魔に食われた、と言われ、この国のようにその場で殺してしまうのが常識だが。
しかし双子が悪魔？なぜ？
人間で、いっぺんに複数生まれて来るのは確かに珍しい。
しかしそんな事は動物の世界では当たり前だし、逆にいっぺんに子供をたくさん授かったことはとても喜ぶべき事だと、母親として思う。
・・・理解できない。
「・・・どうしてそんな事で、悪魔だと決め付けることが出来るのですか？」
王妃は怒気を含んだ声でそう言った。
助産婦は、相変わらず黙り込んだまま。
王はばっと王妃の方に顔を向けた。・・・とても驚いた顔をしていた。
「私は認めません・・・絶対に、認めません。」
いつもは穏やかな性格の王妃が、力強くそう主張した。
彼女を何がそう強くさせるのか。母親とはそういうものなのか・・・

°

跡継ぎ？

王は困惑していた。
ならばどうすれば、どうすればいいというのだ？
またしばらくの静寂。
いつの間にか、赤子たちは泣き止み寝息を立てている。
王妃にも、自分が言っている事が我侭である事は分かっていた。
しかしどうしても可愛いわが子をあきらめる事ができなかった。分かってはいる。しかし・・・
王妃はやっとの想いで、こう提案した。
「・・・ならば、二人が１０歳の誕生日を迎えた時、改めて悪魔を見極める、というのはいかがでしょうか？」
それが残酷なことだと、王妃は理解していた。
それでも、１０年間だけでもいいから愛しい子供達と暮らしたいと、我侭に願っての言葉だった。そう言った王妃の声はかすかに震えていた。
「・・・よいだろう。」
王の言葉に、王妃の瞳の奥がかすかに輝いた。
しかし、王の次の言葉がいとも簡単に王妃の願いを打ち砕いた。
「ただし、これは王妃の心の優しさに免じて死を１０年後に延ばすだけだ。誰がどう見たって、悪魔は男の赤ん坊だと言うだろう。そう思わんかい？助産婦よ。」
その質問に助産婦は言葉を濁らせたが、王は気にも留めずに続けてこう言った。
「男の赤ん坊は誰にも見つからない場所に閉じ込めろ。そうだな・・光も当たらないような所が都合がいいだろう。」
王妃は、背筋がぞっ・・・と、冷たくなるのを感じた。罪悪感が滲み出る。
今殺してあげた方がまだ幸せだろう。悪魔の肩書きをされ、殺すた

めに生かされる。絶対に幸せにはなれない。なれるはずがない。
「あ、・・・」
王妃は思わず小さく声を漏らした。
「・・・しかし、再度悪魔を選ぶのですよね？」
それだと女の子が殺される。呟いてからふと思い出す。
しかしそんなことを考えることさえままならなかった。
自分のせいで、１０年という残酷な時間を創ってしまったのだ。
王妃の心は罪悪感で押しつぶされそうだった。
そんな王妃の心に気付かず、王はこう言った。
「ああ。勿論。約束だからな。しかし結果は変わらんと思うがな。」

すぐに王子を閉じ込める場所が決まった。
王宮の庭園に、誰もいかないような隅の所に、まるでおとぎ話のような薔薇の木を植えてできた迷路がある。
しかし、そこは使用人の掃除も行き届いていないため、草が伸び放題になっている。
そのせいで折角の綺麗な薔薇の花も荒んで見え、余計に人が寄り付いていないのだ。
さて、その迷路の向こう側にはお城の塀との間にスペースがあるだけで、特に何があるという訳ではないのだが、そこに不思議な建造物がある。
迷路から出るとちょっとした白い石を段々に並べて土に埋め込んだだけの簡単な階段が、２３段くらい真直ぐあって、それを降りてスペースから見ると迷路の真下に、石で出来た四角い大きな部屋らしい建物が埋め込むようにあるのだ。石の大きな両開きの扉があることでそれが建物であると何とか分かるようなものだ。
建物の高さは丁度階段の一番上の高さより少し低いくらいで、この建物を埋め込むためにわざわざこの場所を掘り出したように感じられた。スペースの横のかべは、白い石をレンガのように土に埋め込んであるのだが、端の方の石が落ちていて、そこだけ土がむき出し

になっている。
何時の時代の王が、何の目的で造ったかは分からないが、石の箱のようなこの建物の中はどこまでも奥まで通路のようにつながっていて、案外広いので誰かを隠まうために造られたように思われた。
そしてこの建物の存在を知っている人間は極めて少ない。
まあ、とにかく好都合な建物だったのだ。

王は考えていた。
どこかの心無い王が、昔こんな実験をしてみた。
国中の赤子を、母親から離して一つの部屋でミルクを与えるだけで育てたらどうなるのか？
結果は最悪だった。
赤子は一人残らず死んだのだ。ミルクを十分に与えていたのにもかかわらず。
これから王子は同じ条件にいくことになる。
これで王子が死んだとしたら、王女が悪魔だった事になる。
王妃には悪いが、これで王女を殺したとしても、今までとなんら変わりは無い。
本当は二人とも殺すのが常識なのだから。
もし王子が死ななかったら・・・。
それはもう、悪魔と言う証拠以外のなんでもないだろう。

これは、まだ迷信が世界を支配していた時代の物語。
まだ悪魔がどこにでもいた時代の物語。

双子？

三度目の鐘の音に、少女は立ち上がった。
「おやつの時間だわ！」
アンティークド一ルのような顔立ちに似合わず、少女は無邪気にそう言った。
「まだお勉強の途中ですよ、マリア様。」
勢いよく図書室を後にしようとした少女を、家庭教師ミラはすぐに引き止めた。
「えー！毎日毎日勉強ばかり、つまらないわ。」
少女は口をとがらせながらも、渋々イスに腰をおろした。
「では、ここ黄の国の領土拡大に携わった英雄王の所から。」
間をいれずに話し出すミラ。
そんなミラに、マリアは「うぇー」と大げさに舌を出して嫌悪を表現した。
ミラはそんなマリアにため息をつくだけだった。
「いいですか。マリア様。今日はあなたの十歳のお誕生日をお祝いするために、たくさんの国からたくさんの偉い方々が、あなた様の成長振りを見にこの国を訪れるのですよ？そんなはしたない顔をしては、折角の綺麗なお顔が台無しです。」
「そんなの知らないわ！」
今度は間を入れずにマリアが大声を上げた。
「私はもっと遊びたいの！みんなして勉強、勉強って・・・。それにお母様もお父様も、私に隠し事をしているわ！」
「大きな声を上げてはいけません！」
ミラが一喝した。
マリアはそれに対してびくりと一度肩をすくめた。
「・・・それに、王様達がマリア様に隠し事しているなんて、あるわけが無いじゃないですか。」

それに対してマリアは消え入りそうな声でつぶやいた。
「だって、・・・お誕生日が近づく度にお父様はそわそわし始めるし、お母様はとても悲しい顔をするの。まるで私のお祝いなんか頭にないみたいに・・・。」
「マリア様・・・」
ミラはマリアに何も声をかけることが出来なかった。
確かに最近の王様と王妃様はどこかおかしい。
マリアの言うとおり王は上気し妃は悲しい顔を浮かべている。
そう。まるで、マリアの誕生日などどうでもよいかのように。

ついにこの時がやってきた。
王は上気していた。
それでいて本当に、マリアの誕生日など頭になかった。
それどころではない。
ついに、ついに祟り子を、忌々しい悪魔を本当の意味で居なかった事にするのだ。
この十年どれほど憎しみで狂うかと思ったか。
「フっ・・・ふふふっふはははは！」
急に笑いがこみ上げてきた。
王妃はそんな王をただただ理解できずに見つめていた。
王はそんな王妃の様子に気が付くと、
「どうしてそんな顔をしているのだ？今晩は宴なのだぞ？」
「・・・・」
王の言葉に、王妃はうんともすんとも言葉が出ない。
王は少し顔を曇らせたが、余程うれしいのだろう。
あまり気に留めずに、一人でにこみ上げてくる笑いを隠すことが無かった。

トントンッ

不意に扉がノックされた。
「王様、親衛隊長のギルトでございます。」
王はばっと振り返ると、すぐに満足そうな顔になった。
「うむ。入るが良い。」
「失礼いたします。王様、お呼び出しいただきまことに光栄でございます。どのようなご用件でしょうか？」
王はその言葉にうんうんと頷きながら、
「まあ良いではないか。さあ座れ。」
と、親衛隊長を赤い布地に金で縁取られたとても豪華なソファに座らせると、赤ワインの酒瓶を手に持った。
「まあまあ、まずは一杯飲んでくれ。」
それを聞いた親衛隊長は目を見開いて、
「い・・・いいえ！滅相もございません！」
とすぐさま断った。
しかし王はそんなこと気にも留めずに
「何を言うか。ギルトよ。今日は宴じゃぞ？祝わずしてどうする。」
と、返事も聞かずにワイングラスに真っ赤なワインを注ぎいれた。
彼も、出されたものを残すのは罰が悪いと感じ、
「それでは・・・一杯だけ。」
と、おずおずとグラスに口をつけた。
それを見ながら、王は意味有り気に微笑んだ。
「そうじゃ。お前さんをここに呼んだ理由じゃが。」
王はそういうと飲み干されたグラスにもう一度ワインを注ぎいれた。
余程美味しかったのだろう。
親衛隊長はもう拒まなかった。
「何でしょう。王様。」

双子？

「そなたに頼みたい事があるのじゃ。」
王は早々に切り出した。
「はい。何なりと。」
親衛体長は機嫌が良さそうにワインにもう一口、口をつけた。
もう酔いが回り始めている様子だ。
「絶対に秘密に出来ると約束できるか？」
王は言葉とは裏腹に意味ありげな笑みを浮かべながら根強く念を推した。
「はい、勿論であります。」
すっかり酔いの回った様子で、顔を赤くしながら親衛体長は答えた。
いつの間にか王妃の姿は無かった。
「うむ、よい答えだ。そなたに頼みたい事はと言うとだな、殺してもらいたい子供がいるのじゃ。」
いきなりのその言葉に、親衛体長はワインを噴出した。
「・・・っ！？」
そして、唖然とした顔で王を見上げた。
相変わらずの不気味なくらいの笑み。
酔った頭でもその言葉が放つ異質な響きはすぐに理解できた。
「な・・・何をおっしゃっているのです？そもそも誰の子供を・・・」
誰の子供を、という所だけ王は一瞬顔をしかめた。
「誰の子でもない。言うなれば悪魔の子じゃ。」
「は・・・はあ。」
「まあよいではないか。その悪魔は薔薇庭園の向こう側に閉じ込めている。」
そう言って王は親衛体長に古い銅製のずしりと感じる鍵を手渡した。
「庭園の向こう側・・？・・・いえそんな事よりも！私は受けるな

どとは・・・」
親衛体長の言葉をさえぎって、王はこう言った。
「悪魔の存在は絶対に秘密なのじゃ。分かるよな？もし受けてくれるのであればこれは弾む。」
そう言って王は親指と人差し指で輪をつくって見せた。
「しかしもし断るのであれば・・・」
親衛体長はごくりと唾を飲み込んだ。
「・・・まあそう難くなるな。まあまあもう一杯。」
王はまたグラスにワインを注いだ。
親衛体長はそれをいっきに飲み干した。
それを了解とみた王は続けてこう言った。
「庭園の向こう側に、まあ隠し牢のようなものがあるのじゃ。その鍵でそこの錠前を開けられる。鍵はそれともう一つしかないから無くすなよ？・・・お主には今日のパーティを途中で抜け出してもらいたい。前も後も駄目じゃ。最中じゃぞ？よろしく頼むな。」
親衛隊長は無言で頷くとそのまま部屋を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1535s/

悪ノ娘ノ召使

2011年10月8日23時12分発行